

はやし  
林 遺 跡

発掘調査報告書

1993

掛川市教育委員会







はやし  
林 遺 跡

発掘調査報告書

1993

掛川市教育委員会



# 序

掛川市北西部の原野谷川の河岸段丘は古来より人々が住み着いたところとして知られ、遺跡の多い地区です。その中に所在する林遺跡は、北側に春林院古墳があり、すぐ東には原野谷川が流れ、八王子神社に隣接する、現在は閑静な環境にあります。

このたび、遺跡内において宅地造成事業が実施されることに伴い、市教育委員会が発掘調査を行い、やむを得ず記録保存にとどめることになりました。

林遺跡の発掘調査は慎重かつ正確に行われ、その結果古墳時代前期の方形周溝墓や鎌倉時代の集落跡が検出されました。とくに、鎌倉時代の集落跡の発見は掛川市内においてはじめてのことであり、貴重な資料を得ることができました。現在、教育委員会において市史の上巻（原始、古代、中世編）の刊行計画を進めていますので、その資料として活用していくことはもとより、今回の調査で明らかにされた、いにしえの人々の文化遺産が、今後の掛川市のまちづくり、人づくりに生かされていくことを期待しています。

最後に、今回の発掘調査および本書の刊行にあたり、事業者、地元の皆様や関係各位のご理解とご協力に厚くお礼申し上げます。

平成5年12月吉日

掛川市教育委員会

教育長 大 西 珠 枝

## 例　　言

1. 本書は、建売住宅敷地造成工事に先立ち平成3年10月14日より平成3年12月9日まで実施した静岡県掛川市吉岡字庵下1003-1他に所在する林遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、あけぼの開発株式会社の依頼を受け、掛川市教育委員会が実施した。
3. 調査に係わる費用は、全額あけぼの開発㈱が負担した。
4. 現地作業ならびに整理作業では、次の方々の参加を得た。  
本櫻公太郎、大庭虎雄、小沢ろく、山崎すぎ、山崎まち、村松さと、宮崎充子、豊田八重子、大場さだ、鈴木きん、鈴木はつ子、伊藤和子、岡山よね子、鳥居鈴江、荻田ふみ、鈴木辰江、松井田鶴子、松浦せい子、長谷川幸子、椿葉豊子
5. 発掘調査ならびに本書作成にあたり、次の方から御教示をいただいた。記して深く感謝の意を表したい。  
向坂鋼二、鈴木敏剛、佐藤由紀男、松井一明（敬称略）
6. 本書の編集と執筆は、掛川市教育委員会の井村広巳が担当した。ただし、第1章第1節について  
は、掛川市教育委員会の松本一男が執筆した。
7. 発掘調査業務は掛川市教育委員会教育長西ヶ谷免志雄（平成4年9月31日まで）・大西珠枝（平成4年10月1日より）、社会教育課課長樋口葉稔、参事岩井克允（平成5年3月31日まで）、文化係長澤村久雄のもとに社会教育課が所管した。
8. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 掘図における方位は、磁北を示す。
2. 本書で使用した遺構名称は次のとおりである。  
**S Z**：方形周溝墓　　**S H**：掘立柱建物　　**S D**：溝状遺構　　**S K**：土坑　　**S P**：柱穴
3. 遺物実測番号は、写真図版と同一である。
4. 本書の中で使用している渥美・湖西系とは渥美・湖西古窯跡群を示し、尾張系とは瀬戸・猿投・常滑古窯跡群を示す。

# 目 次

序文	
例言	
凡例	
第1章 発掘調査と遺跡の概要	2
第1節 調査に至る経緯と調査の目的	2
第2節 調査の方法と経過	2
第3節 遺跡をめぐる環境	3
第2章 調査の成果	6
第1節 古墳時代	6
第2節 中世	11
1) 掘立柱建物	11
2) 溝	12
3) 土坑	19
4) 柱穴	21
5) 遺構外の遺物	23
第3章 まとめ	29

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図	1
第2図 遺跡の周辺地形図	5
第3図 遺構全体図	7
第4図 古墳時代遺構図	9
第5図 S D08、S K26実測図	10
第6図 中世遺構図	13
第7図 中世掘立柱群と溝配置図	15
第8図 S H01実測図	16
第9図 S H02、03、04実測図	17
第10図 土坑実測図	18
第11図 柱穴実測図	22
第12図 遺物実測図（1）	24
第13図 遺物実測図（2）	25
第14図 遺物実測図（3）	26
第15図 遺物実測図（4）	27
第16図 遺物実測図（5）	28

## 図版目次

図版I	調査区全景（北から）
	調査区全景（南から）
図版II	発掘調査前（北から）
	重機掘削風景
	作業風景
図版III	S Z01（北西から）
	S D08（南から）
	S D08遺物出土状態
図版IV	S H01（西から）
	S H02（北から）
	S K15、16（北から）
	S P195遺物出土状態
	S P394遺物出土状態
図版V	出土遺物（1）
図版VI	出土遺物（2）



1. 林 2. 春林院古墳 3. 西村 4. 吉岡下ノ段 5. 高田上ノ段 6. 中原 7. 溝ノ口  
 8. 東原 9. 今坂 10. 大向 11. 濑戸山Ⅱ 12. 吉岡原 13. 濑戸山Ⅰ 14. 花ノ腰 15. 濑戸  
 山Ⅲ 16. 平田ヶ谷 17. 高田 18. 女高Ⅰ 19. 味噌ヶ谷北 20. 味噌ヶ谷 21. 楠田 22. 赤渕  
 23. 赤渕南 24. 森平 25. 山崎 26. 岡津原Ⅰ 27. 岡津原Ⅳ 28. 岡津原Ⅲ 29. 岡津原Ⅴ  
 30. 黒田 31. 善光寺 32. 三ツ池 33. 殿谷城 34. 各和城 35. 西山城

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

# 第1章 発掘調査と遺跡の概要

## 第1節 調査に至る経緯と調査の目的

林遺跡が所在する掛川市和田岡地区は、中原遺跡・瀬戸山遺跡などのように縄文時代から古墳時代にかけて営まれた遺跡が数多く存在すること、あるいは大塚古墳・瓢塚古墳、各和金塚古墳・行人塚古墳などの前方後円墳や、直径30mを測る円墳の春林院古墳などで構成される和田岡古墳群が存在することで知られている。これら遺跡の多くは原野谷川が形成した河岸段丘上に立地しているが、林遺跡は平野部の微高地に占地する遺跡である。

これまで林遺跡は、北域は八王子神社境内、東・南域は茶畠として利用、保存されてきた。しかし近年の開発により、周辺地では住宅団地適地として造成され、この林遺跡も例外なく住宅団地としての利用が図られるようになった。

今回調査の対象となったこの地において、平成3年6月掛川市土地利用実施計画承認申請（目的：建壳分譲敷地造成）が提出された。これが起因となって、掛川市教育委員会と土地利用申請者あけぼの開発株式会社（磐田市）との間で林遺跡の取り扱いについての協議が始まった。協議ではまず遺跡確認調査を実施して林遺跡の所在状況を確認し、その結果に基づいて土地利用計画上の遺跡の取り扱いを決めることにした（平成3年6月26日掛教社第327号受付「確認調査依頼書」に基づき、平成3年8月16・17日実施）。そしてその結果を踏まえ、土地利用計画上遺跡の消滅の免れない状況となった箇所に対し、止むなき措置として本発掘調査を実施し、記録保存することになった（「吉岡地内に所在する埋蔵文化財に関する協定書」平成3年10月14日締結により実施）。

## 第2節 調査の方法と経過

調査グリッドは、1辺5m四方の区画とした。杭の南北の列を西からA、B、C、D…ラインと呼び、東西の列を南から1、2、3…ラインと呼ぶこととした。この東西、南北のラインの交点をそのままの名称とした。そしてグリッド名は、5m四方の区画の北西角の杭の名称と一致させた。

調査は、重機による表土の除去を行った後、人力により粗掘、遺構の検出及び精査作業を行った。遺構の中から遺物が完形に近い形で出土した場合には、写真撮影を行い、出土状態図を1/10の縮図で作成した。写真による記録は、6×7判（白黒）、35mm判（白黒、リバーサル）カメラを使用した。実測作業は、1m方眼に水糸をはり、1/20の縮図で行った。

調査の経過は、以下のようにおこなった。

平成3年9月30日～

あけぼの開発と市教育委員会の2者の間で、発掘調査に関する協定書について打ち合せを行う。協定書の内容について合意を得たため、発掘調査の準備を始める。

10月14日～10月17日

重機による表土の掘削を行う。

10月18日～11月22日

人力による粗掘り、遺構検出と精査を行う。並行してグリッド設定のため、基本杭を設置する。そして、必要に応じて土層断面及び平面実測を行う。

10月28日

調整池の部分を先に引き渡してほしいとの要望により、12区以北

	の調査を終え、引渡しを行う。引渡しの位置は、杭を打って明示した。
11月25日	発掘区全体の清掃を行い、遺構は石灰で縁どりをおこなう。
11月26日	調査区全体の完掘写真、また遺構ごとに写真撮影を行う。
11月27日～11月29日	大雨のため作業を中断する。
12月2日～12月7日	遺構の実測を行い、現地での作業をすべて終了する。
12月9日	発掘機材の撤収を行い、現地を事業者側へ引き渡す。
整理作業	出土遺物は、ブラシで水洗いを行った後、出土位置を墨で明記（マーキング）をした。セメダインCで接合をした後、土器の実測を行い、写真撮影をした。現地で作成した図面を編集し、報告書用に清書した。原稿を書き、印刷に付した。

### 第3節 遺跡をめぐる環境

#### 1) 地理的環境

掛川市は、静岡県の中西部に位置する。掛川市を中心とした地域は、1800万年から100万年前（新第三紀中新世から第四紀）までの地層が連続して堆積し、丘陵を形成している。古い順に、中新世前期の倉真、西郷層群、鮮新世の掛川層群、更新世の曾我層群、鮮新世から洪積世にかけての小笠山礫層となる。この中でも、掛川層群の大日砂層と天王砂泥層は多くの貝化石を産出することで有名である。北部の地域では、沿岸にむすぶ種類が、南部では沖合いの深いところに生息する種類の貝化石が確認されている。これは、北から南に広がる現在の遠州灘のものがあったと推測される。

林遺跡の位置する場所は、市内でも遺跡が集中する“和田岡”と呼ばれる地域である。この和田岡は、洪積世に原野谷川によって形成された段丘堆積層からなる。和田岡原は、標高60m前後の上位段丘面と標高40～50m前後の下位段丘面に区分される。林遺跡は、この和田岡原下位面よりさらに一段下がった標高30m前後の原野谷川を間近にした所に占地している。

#### 2) 歴史的環境

今回の調査では、中世の遺構を数多く確認したため、中世を中心に歴史的背景を述べていきたい。743年に墾田永世私財法が発せられたことにより、有力な貴族や寺社等は積極的に開墾を行い、大規模な土地経営を行った。これが荘園である。掛川市内でも、西郷、小高、大池、曾我、原田などの荘園が存在していた。当遺跡は、この中の原田荘の一部に含まれていたと考えられるため、原田荘を中心にみていくことにする。

西郷荘は、現在の西郷周辺に位置し、鎌倉時代から室町時代までみられ、建久3年（1192）の院庁下文により後白河院領であったことがわかっている。その後、建武2年（1335）足利尊氏から富権高家に与えられている。小高荘は、現在の西山口周辺に位置し、平安・鎌倉時代にみられ、はじめは大江氏領であったが、のちに藤原兼実に寄進され、大江氏は荘官となる。鎌倉時代になると、実質は御厨となり、上郷・下郷の300町からなっていたようである。大池、曾我については、詳しいことがわかつていない。

そして原田荘が初めて史料に登場するのは、弘長3年（1263）『原田荘正検取帳目録案』の「原田御庄細谷村 注進弘長二年正検取帳目録事」である。そして、永仁3年（1295）の『関東下知状』によると、原田荘の本家である最勝光院、領家の隨心院僧正坊、地頭の原氏の間で訴訟が行われている。

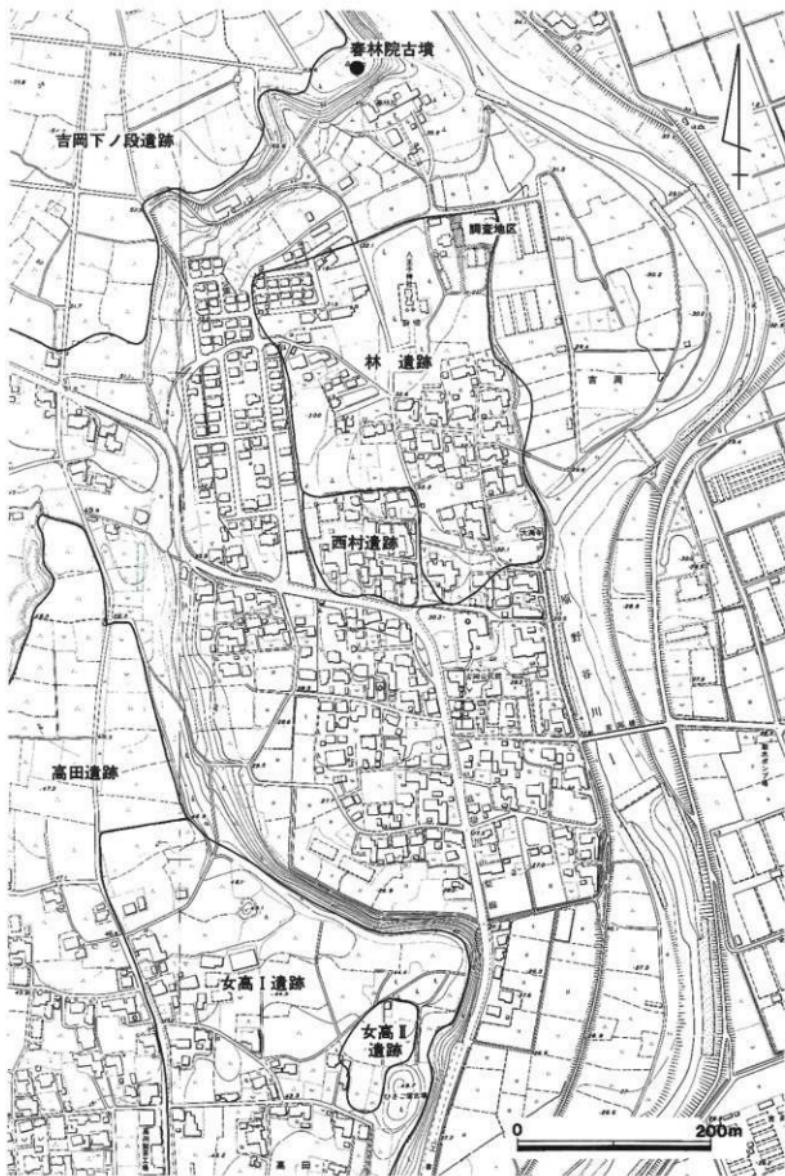
訴訟の結果、原田荘は本郷と細谷郷に二分され、本郷は領家、細谷郷は最勝光院が本家職、領家職をともにもつことになった。原氏は引き続き地頭職を受け継いでいくのである。その後、後醍醐天皇が正中3年（1326）に最勝光院を東寺に寄進したため、原田庄細谷郷は、東寺領となる。そして、室町時代末期まで存続していく。ところで、地頭職として成長していった原氏であるが、平安時代末期頃からこの地で活躍し始めたといえる。原氏が細谷郷の地頭職となってからは、勢力を拡大し、国人領主の地位を築きあげる。15世紀には、殿谷城、各利城をかまえるまでになる。しかし、明応3年（1494）駿河の今川氏の攻撃を受けたことから、衰退していくことになる。

文献史料を基に掛川市内の中世について述べてきたが、考古学的にみた様相はどうであろうか。原川遺跡は、山茶碗、陶磁器など出土し、集落が存在したことが認められるが、古代、近世のような賑わいは、なかったようである。しかし、その東に位置する坂尻遺跡では、庇をもつ大型の掘立柱建物が確認されている。その他、清ノ口遺跡、六ノ坪遺跡では、鎌倉時代の土壙墓が確認されている。また、春林院古墳を発掘調査した際には、墳頂部より山茶碗と骨壺が発見されている。春林院古墳は、林遺跡の200mたらず北に位置することから、当遺跡との関連がうかがわれる。

以上のように、掛川市内における中世の文献史料、考古学的資料とともに少なく、その実態は不明な部分が多い。今後の資料の増加に期待したいところである。

#### 《参考文献》

静岡県民生活局自然保護課	1973年	『ふるさとの自然 西部編』
朝倉書店	1975年	『日本地方地質誌 中部地方』
掛川市	1968年	『掛川市誌』
角川書店	1982年	『角川日本地名大辞典 22 静岡県』
掛川市教育委員会	1985年	『殿谷城址他遺跡 発掘調査報告書』
春林院古墳調査委員会	1966年	『春林院古墳』



第2図 遺跡の周辺地形図

## 第2章 調査の成果

調査では、古墳時代前期の方形周溝墓2基、溝、土坑、ピットと中世の掘立柱建物、柱穴群、土坑を多数確認した。時代別ごとに順次述べていくことにする。

### 第1節 古墳時代

#### S Z01 (第4図)

B-9区からC-9区にかけて検出されたS D01とB-6・7区からC-7区にかけて検出されたS D03が方形周溝墓の2つコーナー部分と考えられる。幅は、両溝ともに約1m、深さはS D01が0.4m、S D02が0.6mである。断面形はゆるやかなU字形である。そして、両溝のコーナー内側には中段をもつ。方形周溝墓の規模は、1辺が13mほどであると推定される。

出土遺物は、S D01から出土したものを第12図1~22、S D03のものを第13図23~26に示している。1~5は壺の破片である。1は、肩部に櫛描きの波状文と横線文を施し、その下に2個1単位の竹管文を4方向に施している。体部には、スヌがかなり付着していた。2と3は肩部小破片である。2は、櫛描き波状文、3は縄文を施している。4、5は壺底部である。6~18は、壺の破片である。9~12は、体部にタキを施している。10は、口唇部に面をもつものである。19~22は、高環脚部である。22は二重口縁状の脚部である。器種は、高环か器台である。外面は、刷毛目の中へラ磨きを施し、透かしが認められる。21は、小型器台である。23、24は、S D03より出土した壺の破片である。23は口縁部に櫛刺突の列点文を施している。25は、台付壺の脚部、26は高環の脚部である。この方形周溝墓の時期は、古墳時代前期前葉（元尾敷様式古段階並行期）に位置づけられる。

#### S Z02 (第4図)

B-4区から検出されたS D13とA-2区からB-2区にかけて検出されたS D10が1つの方形周溝墓と考えられる。S D13はかなり擾乱をうけている。S D10も中世に削平をうけたと考えられ、13世紀代の山茶碗（第13図65）と12世紀代の瀬美・湖西系の甕体部破片（第13図66）が出土した。古墳時代の遺物としては、図示しなかったが、壺底部片、壺口縁部破片が出土している。両溝ともに形が変形しているが、方形周溝墓と認めた。規模は、1辺12mと推定される。

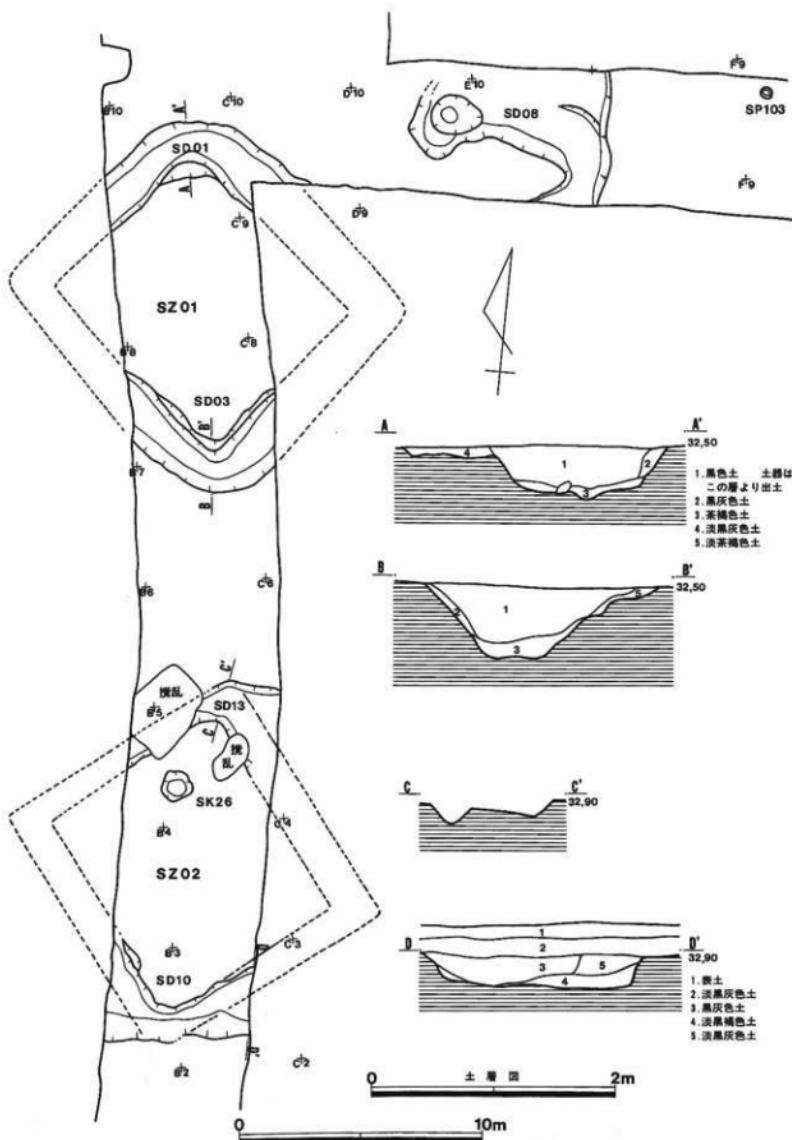
#### S D08 (第5図)

S D08は、D-9区からE-9区にかけて検出された。上面は中世の削平をうけ、深さ0.2mほどである。南東部分で湾曲しており、方形周溝墓の可能性も考えらえる。溝内には、長径2m短径1.5mの土坑が確認され、壺が出土している（第13図27）。体部には、無節縄文を施している。またaの位置から出土したのは、壺の体部片である（第13図28）。縱方向の刷毛目を施したのち、櫛描き横線文を三段、その間に櫛の刺突文を施している。肩部の一部には同じ施文具で楕円形を描いている。そして、体部下半にはヘラ磨きを行っている。わずかに赤彩が認められた。29は、壺の肩部小破片である。半截竹管による沈線文を施し、その下に刻み目を有する突帯をもつ。遠賀川式土器の影響をうけたものと思われ、弥生時代前中期後葉から中期初頭に位置づけられる。

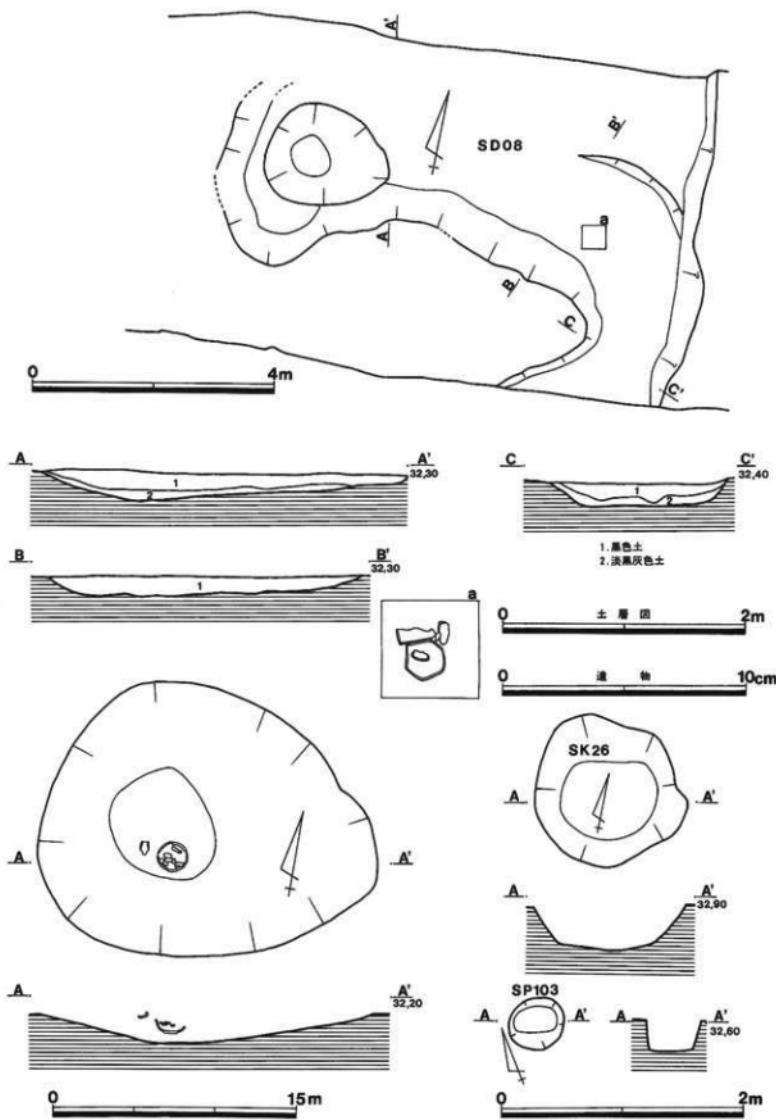
#### S K26 (第5図)



第3図 遺構全体図



第4図 古墳時代遺構図



第5図 SD08・SK26実測図

S K26は、B - 4 区から検出された。長径1.3m、短径1.2m、深さ0.4mである。出土遺物は、台付壺脚部片である（第13図30）。

#### S P103（第5図）

S P103は、F - 9 区から検出された。直径0.4m、深さ0.3mである。出土遺物は、壺の体部小破片である（第13図31）。在地の胎土であるが、東海西部のパレスの亞をかなり意識して作られている。櫛描き横線文と櫛刺突列点文が繰り返し施されている。赤彩も行われている。

#### 遺構外の遺物

B - 3 区東壁より高壙脚部片が出土した（第16図126）。櫛描き横線文と円形の透かしが認められた。

以上が古墳時代の遺構、遺物についてである。

## 第2節 中世

中世と認められる柱穴を400以上、溝8条、土坑25と多数の遺構を検出した。柱穴の一部は、方形周溝墓の溝が埋まったのちに、その溝内に柱穴を掘削していた。それぞれの遺構、遺物について順次説明していく。

なお、ここで渥美・湖西系と尾張系の違いと中世陶器の時期区分について説明しておく。渥美・湖西系と尾張系の違いであるが、第1に胎土によって識別される。渥美・湖西系は、胎土が均一で細かい。それに対し尾張系は、胎土が粗く、1mm大の長石が多く混じる。第2に器形の細部によても識別される。尾張系山茶碗は、渥美・湖西系の同口徑のものに比べ、底径が小さい。また尾張系山茶碗は、口唇部に特徴があり、面を持っている。

中世陶器の時期であるが、山茶碗は、口径が17cm前後が12c後半、16cm前後が13c前半、15cm～14cmが13c中頃、13cm前後が13c後半とした。小皿は、口径9cm前後、器高2.5cm前後が12c後半、口径が9cm前後、器高が2cm前後が13c前半、口径が8cm前後、器高が2cm以下が13c後半とした。

#### 1) 挖立柱建物

4棟の掘立柱建物を確認した。柱穴のほとんどがB - 7 区からB - 9 区間に集中することから、実際にはさらに多くの建物が存在するであろうし、また建て替えも行われていたんだろうと考えられる。ここでは、確実な配置をもつ4棟についてみていきたい。

#### S H01（第8図）

B - C - 8 区からB - C - D - 9 区にかけて検出した。間口（東西の並び）が3間、奥行き（南北の並び）が2間の総柱建物である。間口実長は9.6m、奥行き実長は5.4mである。柱穴はどれも円形を呈する。それぞれの柱穴は、2～3の切り合いが認められ、建て替えがあったと思われる。出土遺物は、第13図の32～37に示した。32と33はS P270から、34と35はS P307から出土した。34は青磁の皿で13世紀代といえる。35は、灰釉の長頸壺の頸部片である。清ヶ谷産で10世紀代の遺物である。36はS P196から出土した。37はS P188から出土した山茶碗片である。尾張系のもので、13世紀前半に位置づけられる。図版VIにS P189から出土した青磁を示した。蓮弁の碗の口縁部であり、13世紀のもの

である。35が唯一10世紀代のものであることから、混入品と考えられる。この建物の時期は、13世紀代であろう。

#### S H02 (第9図)

B-8区で検出した。間口が2間以上、奥行き2間の総柱建物である。間口は調査区外へ延びていると思われる。間口の現存長が4.8m、奥行き実長が4.8mと調査区内においては、柱穴配置は正方形である。出土遺物は、第13図の38~41に示した。38はS P 339から出土した灰釉陶器である。清ヶ谷産で11世紀後半に位置づけられる。39はS P 207、40はS P 216から出土した。39と40は渥美・湖西系である。41はS P 279から出土した古瀬戸の大皿である。14世紀後半~15世紀代のものである。建物の時期であるが、図示した遺物の中でもバラつきがある。その他の柱穴内出土遺物も小片であり、建物の時期を決定づけることはできなかった。

#### S H03 (第9図)

B-6区で検出した。間口2間以上、奥行き2間である。間口は調査区外東へ続くと考えられる。間口の現存長は4m以上、奥行き実長は5.5mである。S H03の柱穴はS H01や02のものと比べて小さく浅い。出土遺物は、小片のみで、建物の時期を決定できるものはなかった。

#### S H04 (第9図)

D-9区を中心に検出した。間口3間、奥行き2間である。間口実長は5.6m、奥行き実長は4.8mである。出土遺物は、第13図42~49に示した。42はS P 232から出土した尾張系の小皿である。13世紀後半のものである。43と44はS P 234から出土した山茶碗とかわらけである。43は13世紀半ばのもので渥美・湖西系である。45はS P 380から出土した皿山鹿の小皿である。13世紀前半に位置する。図示しなかったが、伊勢型鍋の口縁部が出土している。46はS P 64から出土した清ヶ谷産の灰釉陶器である。11世紀後半に位置づけられる。47はS P 84から出土した火窯III期の折縁皿の口縁部である。16世紀後半のものである。48と49はS P 77から出土した。49は白色砂岩の砥石である。全面が使用されている。

### 2) 溝 (第7図)

#### S D02

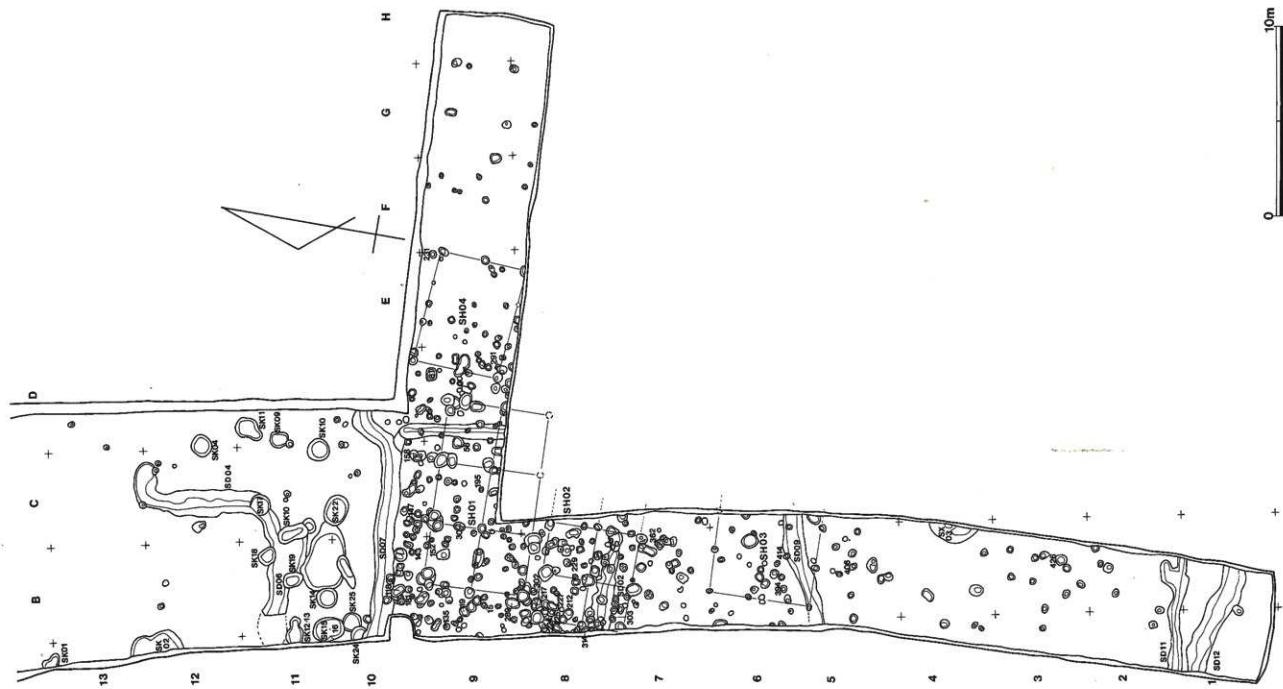
B-8区で検出した。幅は1m、深さは0.3mである。周囲のピットに切られている。出土遺物は小片のみである。

#### S D04

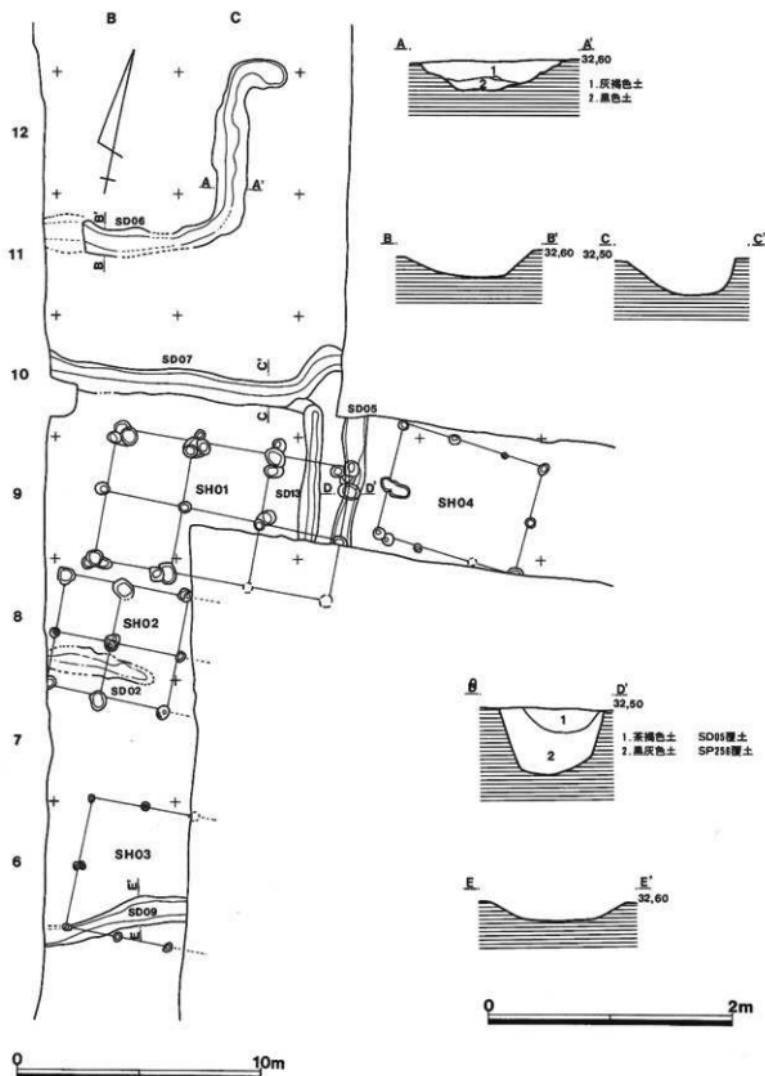
C-11区付近でS K17にきられ、西に曲がりS D06となる。幅1.2m、深さ0.2mを測る。出土遺物は、第14図50に示した。16世紀後半の志<sup>シ</sup>呂焼きのすり鉢の口縁部である。

#### S D05

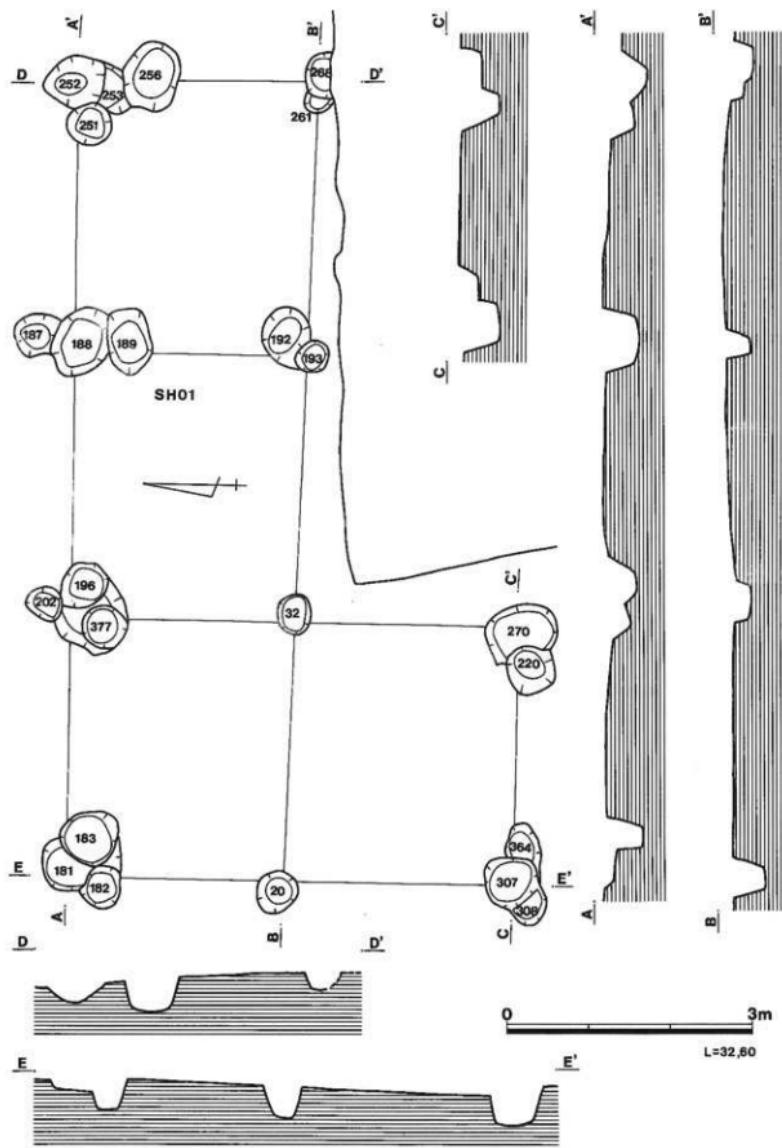
D-9区で検出した。幅0.6m、深さ0.2mを測る。覆土は茶褐色土である。S II01の柱穴S P 256を切っている。出土遺物は、第14図51~56に示した。51と53~55は13世紀代の渥美・湖西系の山茶碗である。52と56は13世紀代の尾張系の山茶碗である。56には、墨書がみられる。出土遺物が13世紀に集中することから、他の遺構に比べ使用期間は短かったようである。



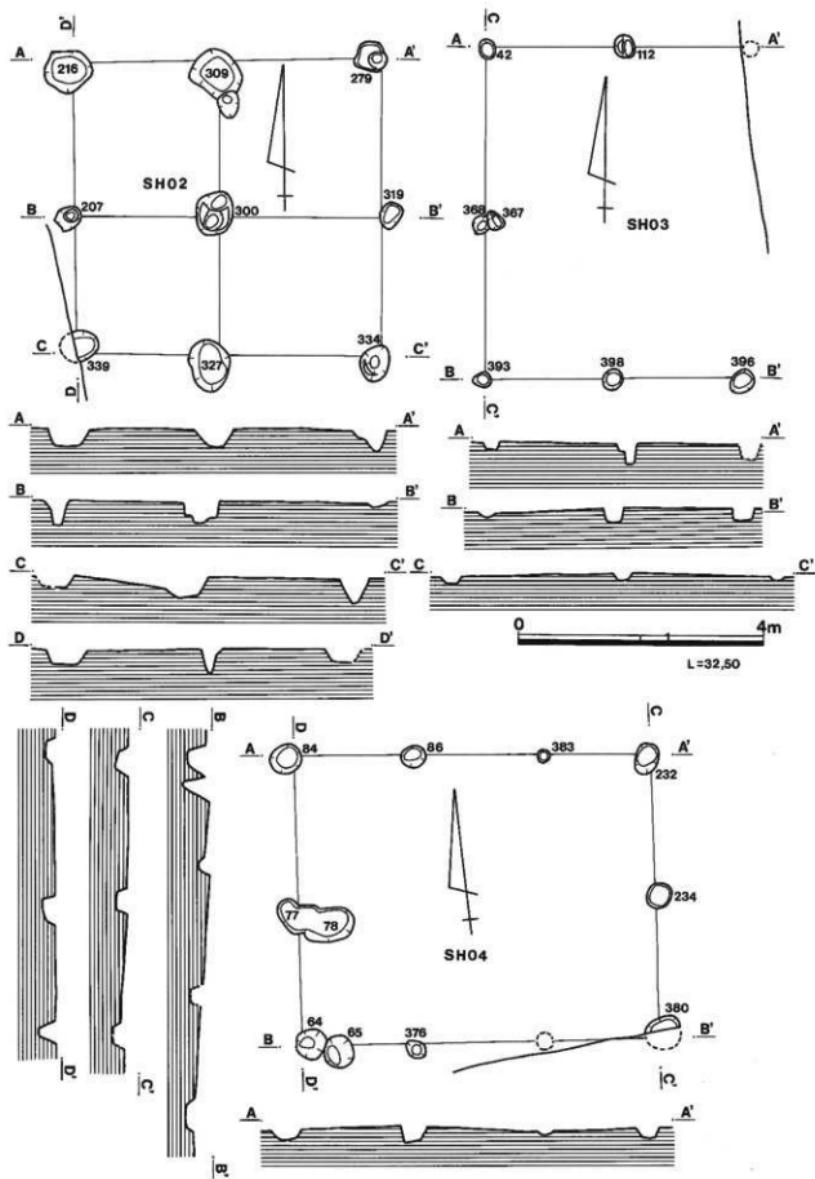
第6図 中世遺構図



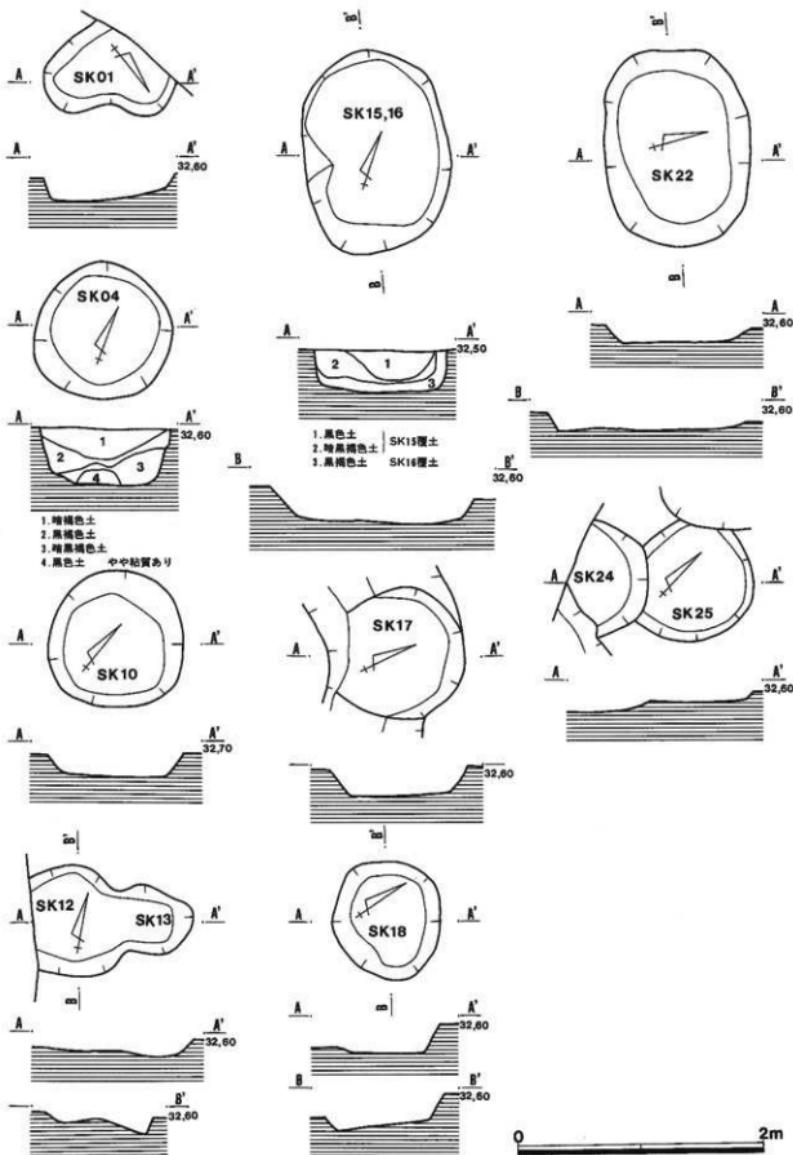
第7図 中世掘立柱群と溝配置図



第8図 SH01実測図



第9図 SH02・03・04実測図



第10図 土坑実測図

#### S D06

B-11区で検出した。幅1.2m、深さ0.2mを測る。SK10-18-19に切られる。出土遺物は、第14図57に示した。13世紀前半の山茶碗である。

#### S D07

B-10区からC-10区にかけて検出した。幅0.8m、深さ0.3mを測る。D-10区から南に曲がり、SD13へ続く。出土遺物は、第14図58-62と写真図版VI152に示した。58は13世紀半ばの尾張系の山茶碗である。59は、10世紀前半の灰釉陶器碗である。60-62は13世紀代の山茶碗である。62には重ね焼き痕が認められた。152は、鉄碎である。この溝の時期は、13世紀と考えられる。

#### S D08

B+C-6区で検出した。幅1m、深さ0.15mを測る。出土遺物は、第14図63・64に示した。63は13世紀前半の尾張系の山茶碗である。64は灰釉陶器の小型碗の底部で10世紀後半と考えられる。

#### S D10

古墳時代の節の中でも触れたように、SD10は中世の溝で、方形周溝墓の溝を削平して作られたと考えられる。

#### S D11

A-2区で検出した。幅0.6m、深さ0.15mを測る。出土遺物は、わずかでしかも小片あった。

#### S D12

A-1区で検出した。幅1m、深さ0.2mを測る。出土遺物は全くなかった。

#### S D13

D-9区で検出した。幅1m、深さ0.15mを測る。出土遺物は全くなかった。

### 3) 土坑（第10図）

土坑は25基検出した。その中で明らかに土壤基といえるものも確認することができた。

#### SK01

A-13・14区で検出した。切り合った2つの遺構と当初は考えたが、土層の堆積状況から1つの土坑と認めた。形は、不整形である。長径1m、短径0.8m、深さ0.2mを測る。出土遺物は、13世紀前半の小皿があった（第14図67）。

#### SK04

C+D-12区で検出した。直径1.1mの円形で、深さ0.6mである。土層の堆積状況は、上から1.暗褐色土 2. 黒褐色土 3. 暗黒褐色土 4. 黒色土（粘性がある）であった。溝ノ口遺跡で確認した中世土壤基と同様な様相を示している。出土遺物は、土師器の小片のみであった。

### **S K10**

C-11区で検出した。S K04と同様直径1.1mの円形で、深さ0.2mを測る。その形状から土壤墓ではないかと考える。出土遺物は、山茶碗の小片があった。

### **S K12・13**

B-11区で検出した。切り合い関係は、不明であった。S K12の短径は0.9m、深さは0.1m、、S K13の短径は0.6m、深さは0.15mである。出土遺物は、S K12から山茶碗が出土した（第14図68）。13世紀前半の尾張系と思われるが、口径が17cmと大きすぎ、高台がない（高台の取れた痕跡はない）。このような類例ではなく、尾張系と言い切れるかどうか疑問も残る。

### **S K15・16**

B-10区で検出した。S K15は直径1m、深さ0.3mの円形、S K16は直径1.1m、深さ0.35mを測る。土層の堆積状況は、上から1. 黒色土 2. 暗黒褐色土（以上がS K15覆土） 3. 黒褐色土（S K16覆土）であった。3層すべてに炭が多量に混じっていた。S K15がS K16を切っている。出土遺物は、S K15で第14図69と70、S K15・16が第14図71と72に示した。70は13世紀代の尾張系の壺である。71の山茶碗の内面には、ススが付着していた。時期は、S K15が13世紀代といえよう。この2基は土壤墓と考えられる。

### **S K17**

C-10区で検出した。直径1m、深さ0.2mの円形である。出土遺物はなかった。

### **S K18**

B-11区で検出した。長径1m、短径0.9m、深さ0.2mの楕円形である。出土遺物には、12世紀後半の小皿がある（第14図73）。

### **S K22**

C-10区で検出した。長径1.6m、短径1.2m、深さ0.1mの楕円形である。出土遺物は、第14図74～77に示した。74は、12世紀後半の渥美・湖西系の山茶碗である。75と76は13世紀前半の尾張系の山茶碗である。77は大型のかわらけで、ロクロ成形である。14世紀後半～15世紀代と考えられる。

### **S K24・25**

B-10区で検出した。S K24は直径1m、深さ0.1mの円形、S K25は、直径1m、深さ0.1mの円形である。S K24がS K25を切っている。

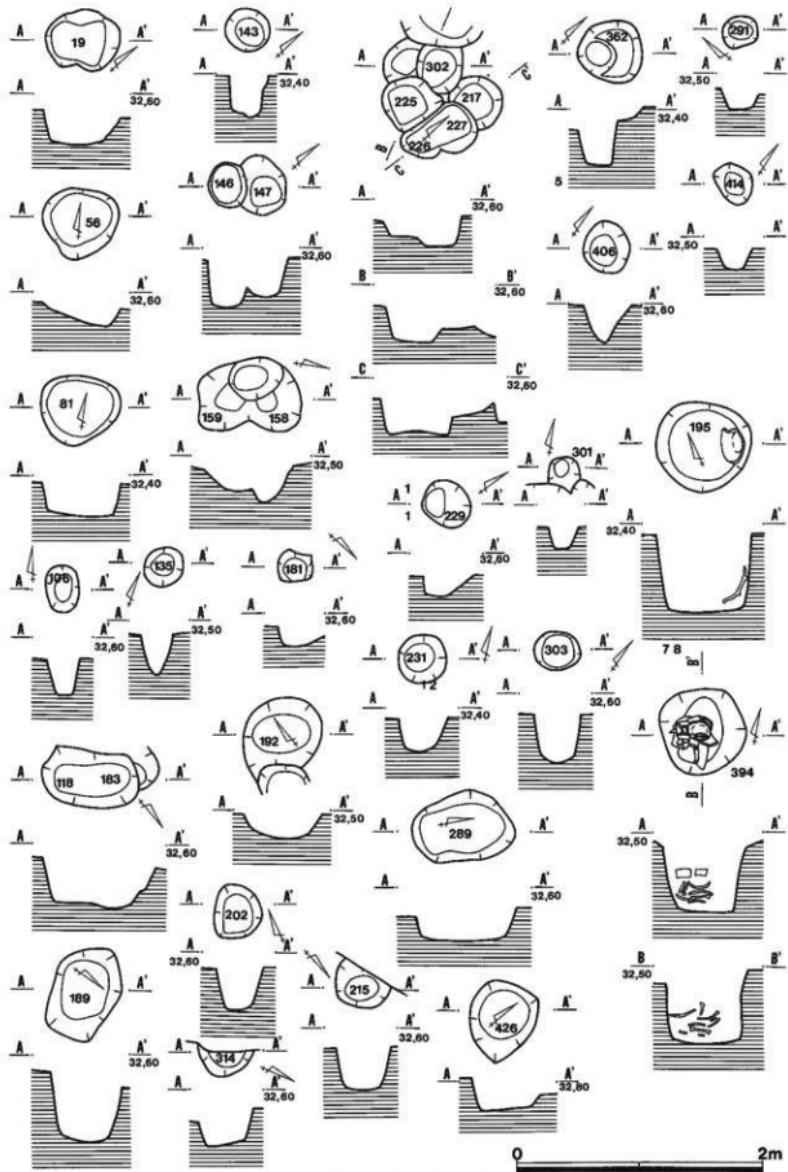
#### 4) ピット

400以上のピットを確認したが、遺物を出土したものを中心以下に表に示した。

遺構No.	グリッド名	形 状	長径	短径	深さ	挿引No.	備 考
19	B-9	楕円形	0.6	0.5	0.25	78	15c 大型かわらけ
30	C-9	円 形	0.3	0.3	0.15	149	陶器
56	D-10	円 形	0.6		0.1	79	かわらけ
78	D-9	楕円形	0.8	0.6	0.15	80	13c 墨書 内面スス付着
81	D-9	円 形	0.7	0.6	0.1	81~83	13c 前半 山茶碗 小皿
118	B-10	円 形	0.45		0.4		13c 中 山茶碗 湿美・湖西系
143	B-10	円 形	0.35		0.35	84	内面スス付着
146	C-10	楕円形	0.4	0.3	0.4		
147	C-10	楕円形	0.5	0.4	0.35	85・86	85 灰釉陶器
158	C-10	楕円形	0.45		0.3	87	
159	C-10	不整形	0.5		0.25		
181	B-10	円 形	0.3		0.15	88~91	88 12c 後半 湿美・湖西系 89・90・91 尾張系
189	C-9	楕円形	0.8	0.5	0.55	92・93 149	92 土器裏 93 13c かわらけ 149 青磁 連弁の碗
192	C-9	楕円形	0.65	0.55	0.2	94	墨書
195	C-9	円 形	0.8		0.6	95	13c 前半 湿美・湖西系
202	C-10	隅丸方形	0.45	0.4	0.35	96	13c 前半 小皿 湿美・湖西系
212	B-8	楕円形	0.6	0.5	0.32	150	青磁 碗
215	B-8	隅丸方形	0.45		0.35	97	墨書
217	B-8	隅丸方形	0.45		0.11	98	
220	B-8	円 形	0.6		0.43	99~101 153	99 11c 後半 灰釉陶器 101 13c 入子 尾張系
225	B-8	隅丸方形	0.4		0.3	102	13c 前半 山茶碗 尾張系
227	B-8	不整形	0.4		0.28	103	
229	B-8	楕円形	0.4	0.35	0.15	104	
231	E・F-9	円 形	0.4		0.25	105・106	
289	B-9	楕円形	0.9	0.6	0.2	107	9c~10c 前半 灰釉の子壺あり
291	D-9	円 形	0.3	0.25	0.2	108・109	109 尾張系
301	B-9	隅丸方形	0.25		0.2	110・111	110・111 13c 前半 尾張系
302	B-8	円 形	0.4		0.21	112	13c 前半 湿美・湖西系
303	B-8	楕円形	0.4	0.3	0.4	113・114	
314	B-8	円 形	0.4		0.3	122	土錐
362	B-7	円 形	0.5		0.5	115	
394	B-6	隅丸方形	0.7		0.6	116~120	12c 後半 湿美・湖西系
406	B-5	円 形	0.45	0.4	0.33	121	
414	B-6	不整形	0.35	0.3	0.23	123	12c 後半 片口鉢 湿美・湖西系
426	B-3	不整形	0.55		0.25	124	釘

表1 ピット観察表

(単位m)

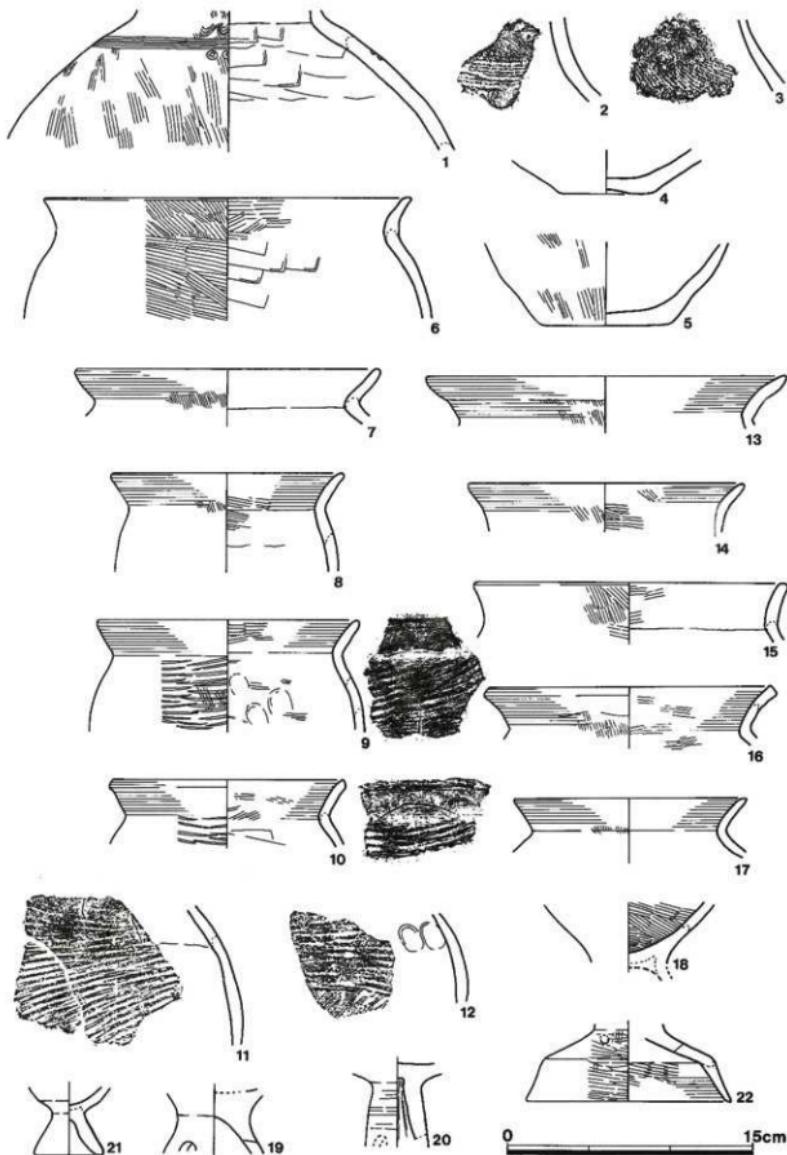


第11図 柱穴実測図

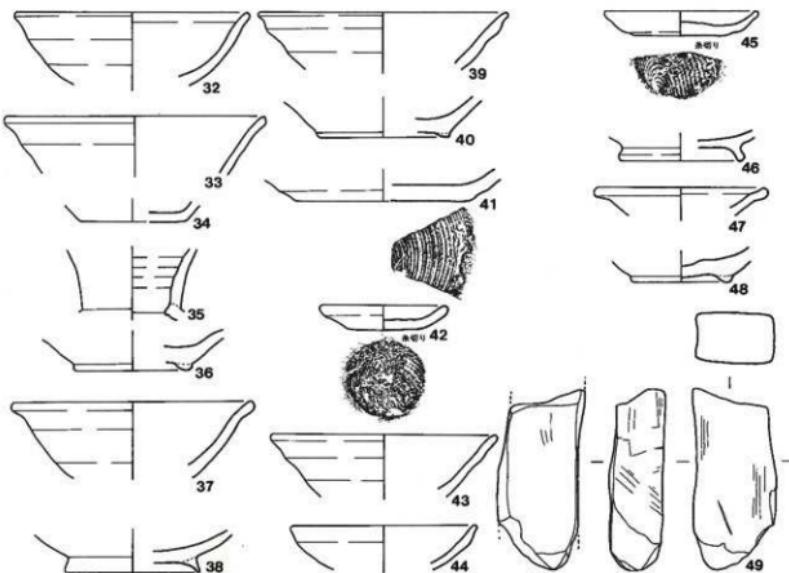
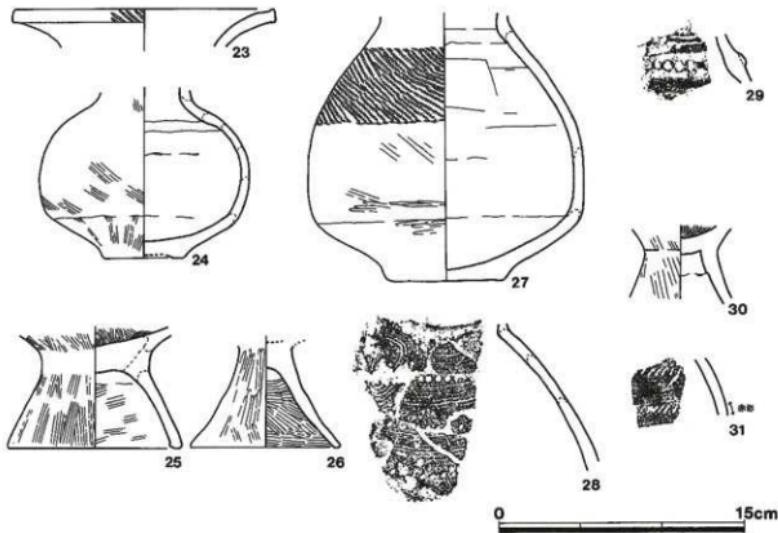
## 5) 遺構外の遺物

遺構外の遺物は、第16図127～147に図示した。

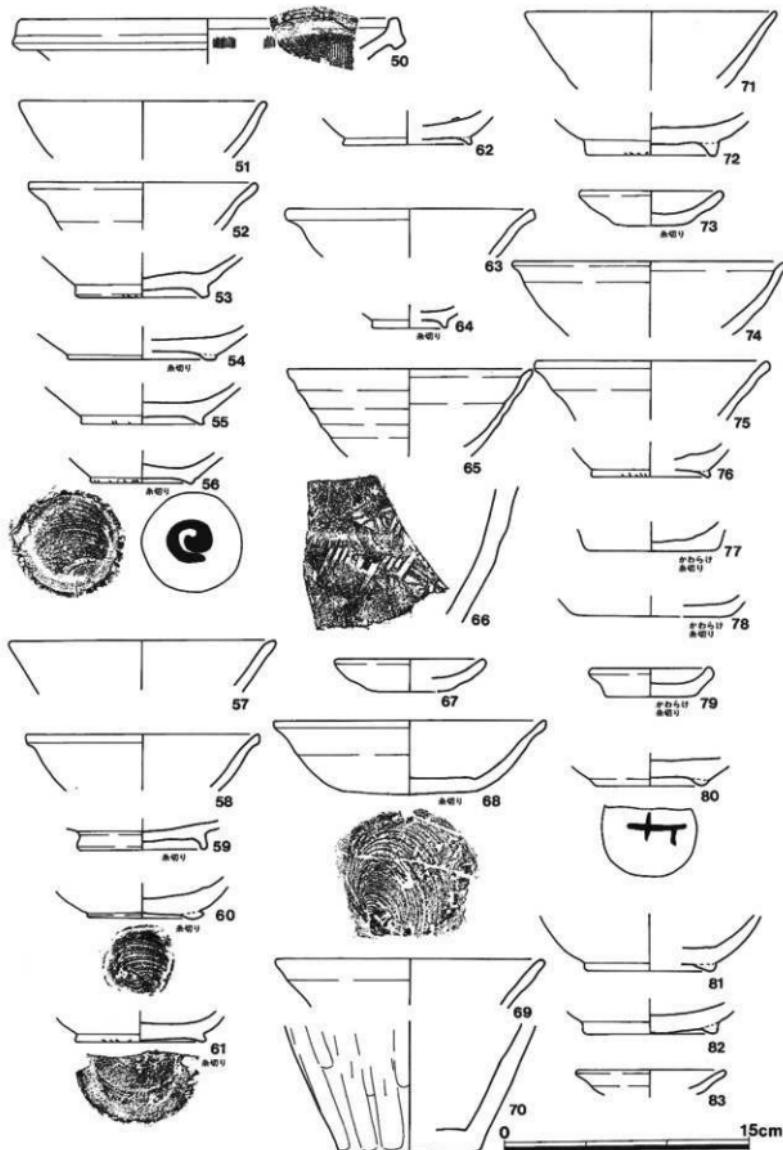
125は、A-1区から出土したすり鉢である。志戸呂焼きの17世紀後半から18世紀前半のものである。127は、B-7区から出土した瓶子の胴部破片である。草花文が施されている。128は、B-9区から出土した山茶碗の底部である。129は、C-9区の東壁から出土した山茶碗である。13世紀前半～中ばのもので、墨書が認められた。C-9区からは、130～133が出土した。130と131は、11世紀後半の灰釉陶器で清ヶ谷産である。134と135はD-9区の黒色土から出土した。135は、常滑焼きの大甕で13世紀後半に位置づけられる。136と138は、D-9区から出土した。136は、尾張系の片口鉢である。138は、刀子である。137と139は、D-10区から出土した。137は、13世紀中頃の渥美・湖西系の山茶碗である。139は、13世紀前半の尾張系の小皿である。また、図示しなかったが、D-10区からは、9～10世紀の灰釉の壺の口縁部が出土している。140は、E-8区から出土した灰釉陶器である。10世紀前半の清ヶ谷産である。灰釉は、刷毛塗りされている。141～144は、E-9区から出土した。141は、13世紀前半の尾張系も山茶碗である。墨書が認められた。143は、10世紀後半の灰釉陶器で清ヶ谷産である。144は、13世紀前半の小皿で尾張系である。145～147は、E-9区の黒色土から出土した。146と147は、13世紀前半の小皿である。



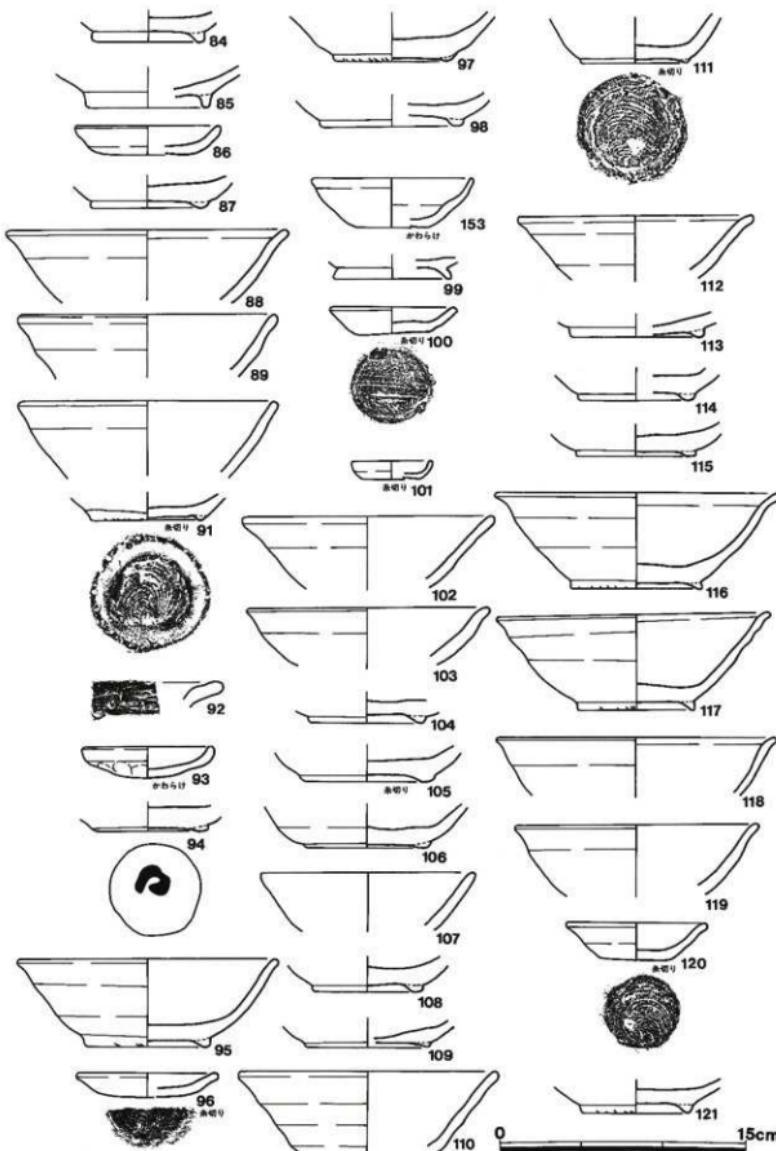
第12図 遺物実測図（1）



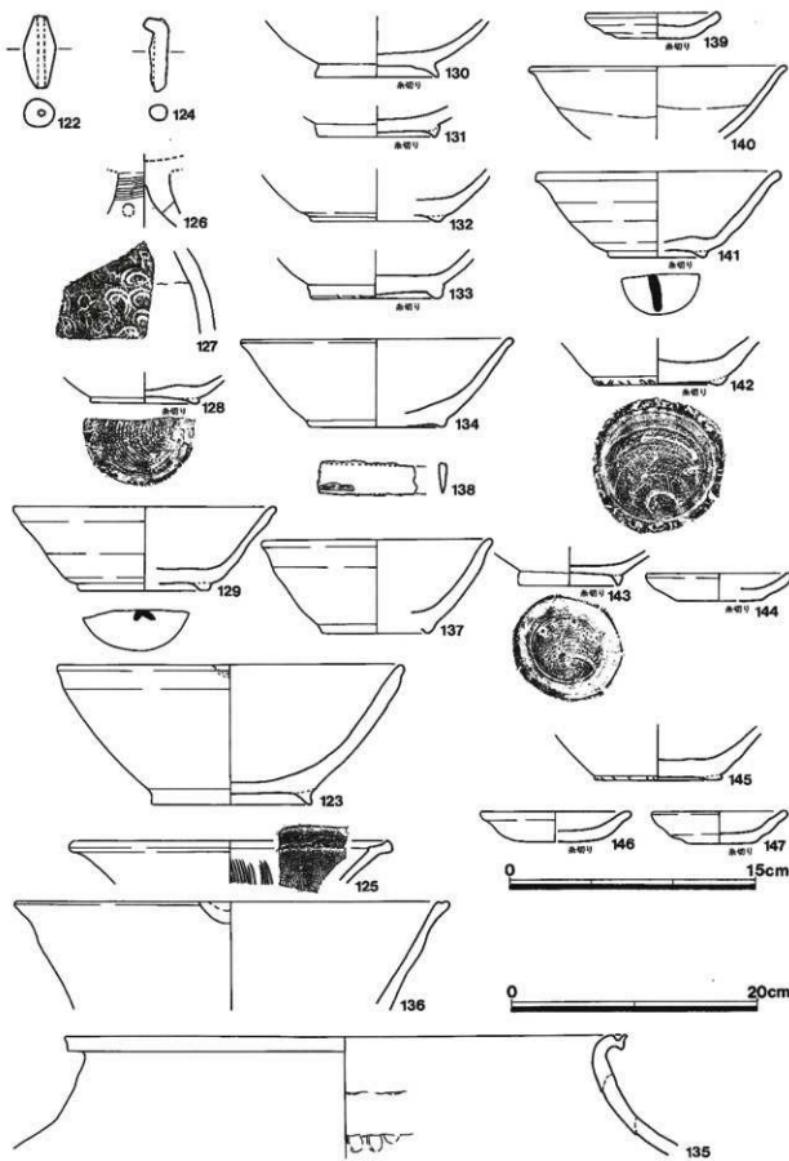
第13図 遺物実測図（2）



第14図 遺物実測図 (3)



第15図 遺物実測図 (4)



第16図 遺物実測図（5）

## 第3章 まとめ

発掘調査によって得られた成果を時期別に記していきたい。

### 1) 古墳時代

古墳時代前期前葉の方形周溝墓と土坑、ピットを確認した。方形周溝墓は、北に位置する春林院古墳をはじめ、古墳時代中期の和田岡古墳群に先行するものである。和田岡原では、林遺跡と同様に古墳時代前期の方形周溝墓が、確認されている。女高遺跡1号墓は、1辺12mの規模を有する。溝からは、複合口縁部壺が出土している。女高遺跡では、他に方形周溝墓状造構が確認されており、その数が増加すると考えられる。高田遺跡1号墓は、1辺12.4mの規模である。報告では、時期不正確で古墳の周溝とされているものである。溝の幅は3m、深さ0.5mと林遺跡のものと比べてやや大きいことがわかる。これら古墳時代前期の遺構は、古墳時代中期の和田岡古墳群を考えるなかで、今後位置づけをおこないたい。

また、小片であるが、弥生時代前期末もしくは中期初頭の土器が出土した。和田岡原に存在する遺跡は、弥生時代後期後半から爆発的に増加する。それ以前である弥生時代中期遺跡の存在は、ほとんど知られていない。そういうことから、土器1片であるが、この時期の遺跡が周辺に存在する可能性があり、注目される。

### 2) 中世

古墳時代前期以降、この地域で集落は営まれなくなり、再び集落を形成するのは10世紀にはいったからである。そして、その中でも13世紀代を中心とした中世の集落の様相を確認できたことは、掛川市内の中世を知るうえで、大変重要であるといえる。

#### ①掘立柱建物

掘立柱建物の時期が不確定なものもあるが、周辺から出土する土器の量から考えてほとんどが、13世紀代とみて良いだろう。第7図に掘立柱建物群と溝の配置図を示した。掘立柱建物は、4棟すべてが同時期に機能していたかは不明であるが、棟方向がほぼ並行するように配置されている。そして、南北をSD07とSD09に囲まれた約20m内には、これらの掘立柱建物の他にも柱穴と考えられるピットも集中している。SD07と09は区画溝で、1つの屋敷内を巡っていたものであろう。また、SD07の北に土坑が集中し、その中には、土壙墓と考えられるものも存在している。この土壙墓は、掘立柱建物の時期と同時期であることから、溝によって区画された屋敷の北外に墓地を設定したと見ることができる。

ところで、前述したようにこの地域は、原田荘の一部にあたる。この屋敷内に居住していた人も、その莊園を支えていた有力な農民層であったと考えることもできよう。

#### ②山茶碗

今回の調査により数多くの山茶碗が出土した。その中で、13世紀代の製品が最も多かった。この時期に絞って産地別の分類を行った。その結果を表2に示す。対象とした土器は、図示した山茶碗と小皿である。図示する土器を抽出するにあたっては、山茶碗は、口縁部ならば4cm四方以上の破片、底部ならば、1/5以上残存するものを選んだ。その結果、山茶碗は、尾張系が1/3を占めていることが判明した。東遠江においては、渥美・湖西系または、東遠江系山茶碗でほとんどが賄われていたかと思われたが、予想とはだいぶ異なる結果が出た。東遠江系の山茶碗は、1片も確認されなかつばかりか、尾張系が思いのほか多い。

### 山茶碗（総数58）

渥美・湖西系 67% (39点)	尾張系33% (19点)	
小皿（総数10）		
東遠江系20% (2点)	渥美・湖西系50% (5点)	尾張系30% (3点)

表2 13世紀山茶碗・小皿産地別分類表

次に古窯について少しみていきたい。東遠江系においては、山茶碗生産の時期に入ると、全体的に生産量は激減する。清ヶ谷古窯は、13世紀前半以降の生産は、ほぼストップする。一方、さらに東の金谷、相良などでも新しい窯も散発的に操業が開始されるが、灰釉陶器の生産に比べれば、わずかである。そして、渥美・湖西系においては、渥美古窯では13世紀前半以降生産がな行われなくなり、湖西古窯でも13世紀後半まで操業が行われなくなる。中世における湖西古窯の最盛期は、12世紀後半だったようである。尾張系は、どうであろうか。尾張系とした瀬戸古窯は、10世紀後半の灰釉陶器から操業を始め、山茶碗に引きつがれ14世紀末まで生産を続けている。そして、12世紀末から古瀬戸の操業を開始している。猿投古窯は、9世紀初頭に灰釉陶器を生産し始め、13世紀中頃には消滅してしまう。常滑古窯は、12世紀前半に操業を開始し、山茶碗に引きつがれ14世紀前半まで生産している。尾張系古窯の操業期間は、渥美・湖西や東遠江系に比して、長いことがわかる。

以上3つの地域の様相を述べたが、13世紀という時代は、山茶碗の生産活動においては過渡期にあるといえる。地元である渥美・湖西、東遠江の古窯は、次第に衰退していく、他方、尾張系は盛んに操業を行い、その流通範囲を広めている。さらに尾張系では、次第に施釉陶器の生産を増加していく。林遺跡における1/3に及ぶ尾張系山茶碗の搬入は、上記の変化を如実に示すものと思われる。

東遠江系、渥美・湖西系山茶碗の流通については、次第に明らかにされつつあるが、尾張系との関連はまだまだ検討不足である。今後の中世遺跡の調査を通して検討をしていきたい。

#### 《参考文献》

- |                |         |                                   |
|----------------|---------|-----------------------------------|
| 掛川市教育委員会       | 1985年3月 | 『女高遺跡』                            |
| 掛川市教育委員会       | 1988年   | 『高田遺跡』                            |
| 静岡県教育委員会       | 1989年   | 『静岡県の窯業遺跡』                        |
| 松井一明           | 1993年   | 『遠江における山茶碗生産について』<br>『静岡県考古学研究』25 |
| (財)瀬戸市埋蔵文化センター | 1993年   | 『東海の中世窯』                          |

# 図 版





調査区全景（北から）



調査区全景（南から）





発掘調査前（北から）

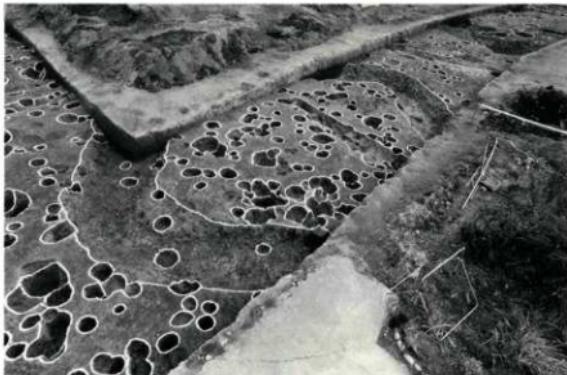


重機掘削風景

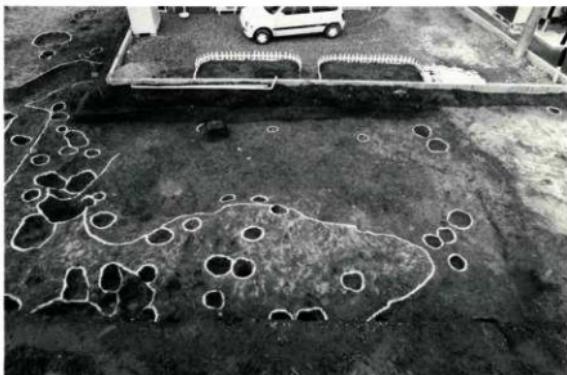


作業風景





SZ01 (北西から)

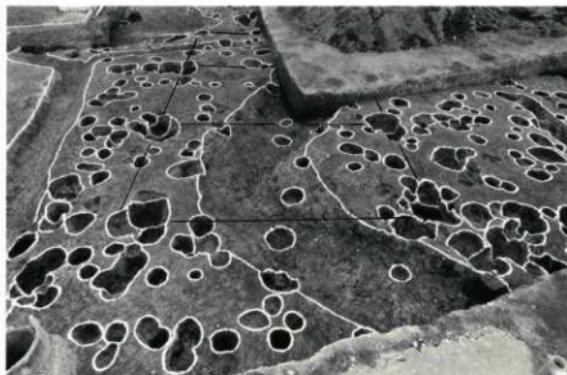


SD08 (南から)

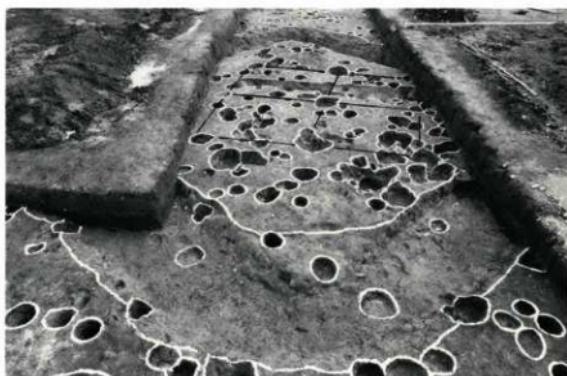


SD08遺物出土状態





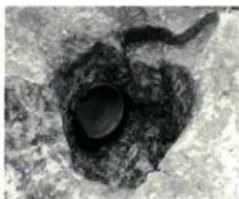
SH01 (西から)



SH02 (北から)



SK15、16 (北から)



SP195遺物出土状態



SP394遺物出土状態





1



20



19



24



21



22



27



30



26



2



3



9



11-1



11



12



31



28



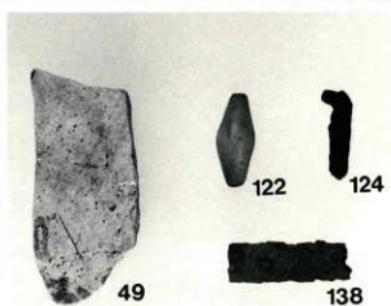
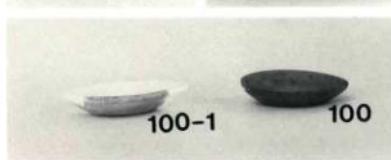
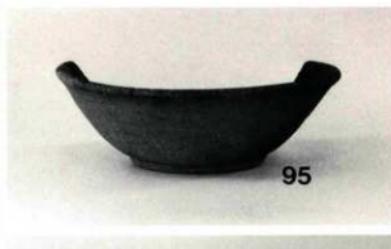
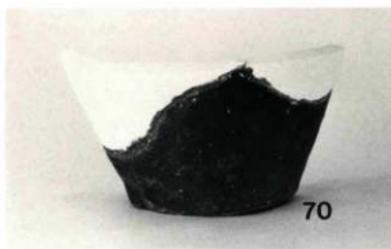
29

出土遺物（I）

SD01-1-3  
9-11-12  
19-22  
SK26-30

SD03-24-26  
SD08 27-28-29  
SP103-31





出土遺物（2）

SK15-70, SD05-56, SD07-152  
SP78-80, SP215-97, SP220-100  
SP30-149, SP189-150, SP212-151  
B 7区-127, SD01-148

SP195-95, SP394-116-117-120  
SP77-49, SP314-122, SP426-124  
D 9区-138



林 遺 跡

発掘調査報告書

1993

編集発行 掛川市教育委員会

掛川市水垂51

TEL (0537) 24-7773

印 刷 株式会社 三 創

静岡市中村町166-1

TEL (054) 282-4031





